

モノ作りの視点で、電気工事業を改めて捉え直す

◇5年前、中堅・大手電気工事会社の新卒者採用支援を目的とする『週刊電業特報別冊・就活特集号』を創刊し、専門学校、都立職業能力開発センター、大学など合わせて約20校の就職支援担当者や教職員の方々へ送らせていただいている。就活特集号を各学校へ送る時期は異なり、専門学校へは2年生になる直前の3月、就活が9月16日に解禁される職業能力開発センターへは8月中旬、大学へは8月上旬に郵送している。大学の場合、8月は既に内定者が続出状態だが内定を受けていない学生も少なからずいる。電気工事会社への就職を第一志望にしている学生は少ないため、内定がほぼ出そろった8月頃が妥当ではないか、というアドバイスを親しい大学担当者から受け、現在に至っている。

◇昨年、電設資材卸会社の採用広告を掲載している。電材卸業は、電気工事業にかかわる不可欠な業種であるとともに、学生にとって就職先の選択肢の拡大につながるかと捉えているためである。電気工事士の資格取得を目指す専門学校、職能センターであっても、電気工事業界や電気工事市場がどういったものであるかを理解している学生は少ない。学校へ出向き、生徒たちに業界や市場の話をするなかで感じることである。

このため就活特集号には、社会インフラとしての電気工事業を分かりやすく説明するとともに、具体的な仕事内容や学生が興味を持つような話題性のある記事を載せ、2019年度版では、全日電工連の全国青年部協議会による作業着ファッションショーの様子を写真とともに紹介している。

◇電気工事業界を知る上で卒業生の声は重要で、専門学校、職能センター、大学それぞれのOBを取材し、送り先の学校に合わせて毎回インタビュー記事を掲載している。先日、大学版発行のために某大学工学部を今春卒業した代人志望の社員を取材した。電気工事士の資格は取得していない。年2回行われる後半の試験を受けるといふ。電気工事会社への就職動機は、モノ作りが好きだったから。強電ではなく、弱電のモノ作りを望んでいたが、同じモノ作りであれば、規模の大きい強電が面白いということで、強電を学ぶエネルギーコースを履修した。今年10月から先輩に付いて現場代理人の見習いに就くが、頭(知恵)と身体(体力)の両方を生かせる代人業務を今から楽しみにしている。

◇代人業務に関する国家資格には施工管理技士(1級・2級)があるが、この『施工』という言葉の響きに、学生はブラックをイメージする、と当該の新人社員は言う。施工は、体力仕事できつい、というイメージが強くあるようだ。本人もそう捉えていたが、モノづくりの魅力が、ブラックイメージを上回り、電気工事会社への就職につながった。また、2週間のインターンシップを体験するなかで、社内の明るい雰囲気を実感し、優しく接してくれる社員が数多くいることを理解したことで、仮にきつい仕事であっても乗り越えられる、と思ったと言う。今後、若年者の減少が継続的に進むなかで新卒者の採用はますます厳しくなる。モノ作りの視点に立つて、電気工事業を捉え直すことによつて、若年層にアピールできることは少なくない。